

## 奥羽大学歯学会の現在，そして未来へ

金 秀 樹

平成20年の第45回奥羽大学歯学会から学会委員会委員として、また平成24年の第53回の奥羽大学歯学会より奥羽大学歯学会の学会理事として過去10年にわたり学会に携わらせて頂いております。この度は学会委員の立場から奥羽大学歯学会の歩みを振り返ってみたいと思います。

まずは運営について振り返ってみますと、歯学会発足当初は本学附属病院臨床講義室で開催されていましたが、平成11年の第27回奥羽大学歯学会より場所を本学第2講義棟に移して開催されるようになりました。さらに、平成21年の第49回から再度、本学附属病院臨床講義室に場所を移し現在まで開催を継続して行っております。学会委員として参加した当初は学会理事より言われるがままに右も左もわからない状態で参加していましたが、学会の前日設営は営繕課の皆様のお力をお借りしながら本学附属病院の学会用倉庫から備品を第2講義棟に運ぶ労力の大変さに驚きを隠せませんでした。設営する備品が大量で、しかも重い備品が多いため運搬車を病院棟前に横付けして大勢の学会スタッフと協力して輸送していました。学会委員になる以前は本学会が毎年開催されることが自然であり、そこに至る準備のことなど頭にもなく、当たり前のように発表していましたが、学会を開催するにあたり企画運営する立場となり、学会関係者の様々なご苦勞、ご配慮ならびに設営準備の大変さがようやく理解できるようになりました。現在は附属病院の臨床講義室で開催されるようになり学会前日の備品の移動に関しては簡素化されて、企画運営する側としては、効率的になり準備するスタッフの負担軽減につながっているのではないかと考えております。前日の準備や設営もさることながら、学会を開催するために半年以上前から多くの学会委員の会議を重ねて試行錯誤しながら作り上げられていることも学会委員となり始めて知りました。

学会発表に関しては毎年、6月と11月に年2回の開催で平成20年の第45回歯学会以降は平均14演題の口演発表がありますが、6月の歯学会は11月の歯学会と比べると多少演題数が少なく、11月の歯学会に演題が多く集まる傾向があります。これは大学院生の膨大な研究成果の資料をぎりぎりまで塾考をされた学位口演が秋に集中するためと考えられます。奥羽大学歯学会は大学院生の研究成果発表の場として重要な役割を果たしていますが、東日本大震災の年も歯学会は例年と変わらず開催することが出来たことは本学教職員の諦めない気持ち、たゆまぬ努力と団結力の賜物であり、安堵の思いでいっぱいです。

学会参加者は数年前より5年生を中心とした学生が多数参加するようになり、臨床講義室が満席になることも近年では多く見受けられ、以前より活気が出てきています。普段の講義や実習の場と違う教員を目の当たりすることにより学生も自分たちの将来の目標を明確にもつような意識改革ができていているように感じます。また教員にとっても学生

にみられるという刺激や励みにもなり相乗効果があると思います。今後もより多くの参加者が学会に参加することで学会が繁栄していくのではないのでしょうか。

最近では2015年度より本学で導入した ES（エレクトィブスタディ）の成果が出てきているように思います。1年次より基礎系，臨床系問わず学生自ら自分の興味のある講座に出向いて前期，後期ともに週に2時間ではありますが学生自らが選択した講座に出向き，様々な研究・実験・体験をする機会があります。そこで得た多くの貴重な体験が本人の能力開発にもつながり，各分野の専門の先生方と触れ合うことで人間性の涵養，成長がみられます。特に今年度の11月の歯学会では5名の学生から演題申し込みがあり，多くの分野から完成度の高い発表がなされていました。質疑応答にも堂々と答えられている将来の本学の研究者の「金の卵」の姿を拝見して頼もしい限りでした。

近年の歯科界をみると研究者の育成は全国どこの歯学部をみても苦労されているという話を耳にしますが，学生時代より研究に対する楽しみ，成果を出すまでの過程の大変さなどを体験し実際に現場の研究者と触れ合うことで学生本人の成長を促していくという地道な努力こそが将来の研究者の育成，大学の発展につながっていくのではないかと思います。

各分野からの発表は以前と比較しますとやや減少している傾向にあります。本学教員においても各分野の研究成果をより専門的な学会で発表する前段階のトレーニングの場として有効に活用頂ければいいと思います。理想的には各分野から毎年1年に1回は奥羽大学歯学会で発表して頂く形になればもっと活性化されるのではないかと考えます。他にも臨床系，基礎系の各分野だけでなく教職員からの発表も学会の底上げとなり大学自体の意識改革につながっていくものと思われまます。

奥羽大学歯学誌について振り返ってみますと，年に4回の奥羽大学歯学誌の発刊がありますが，ここ数年は合併号で発刊される年もあり，編集委員の皆様方にも頭を悩ませご苦労をおかけする機会がございます。学生教育の現場として教育・研究・臨床の3つのバランスが重要であり，各専門学会への論文投稿は当然必要ではありますが，教育・研究・臨床の成果を奥羽大学歯学誌を念頭に置きながら積極的にご投稿お願いいたします。近い将来，奥羽大学歯学会から日本全国へ，さらには世界へワールドワイドに活躍できる人材を育成することができるよう今後も本学会の発展を心より祈念いたしております。

(奥羽大学歯学会 学会理事)